

中学校における性に関わる健康教育

—養護教諭によるライフスキルの形成に焦点をあてた性教育プログラムの実践—

専攻 教育実践高度化専攻
コース 心の教育実践コース
学籍番号 P 0 9 0 5 1 K
氏名 丸田 恵子

1. 問題の所在と目的

近年、青少年の性行動の低年齢化、若年層の性感染症の感染拡大等が問題視されている。一方で、教育現場においては性に関わる教育に対し抵抗感や躊躇、考え方の相違が存在し進みにくい現状がある。保健室で生徒の実態に触れ、性に関わる問題に直面しやすい養護教諭は二次予防中心の対応だけでなくその専門性や職務の特質を活かし一次予防としての保健学習や保健指導に積極的に関わっていくことが求められる。今回の実践では中学校における性に関わる教育の現状と課題をふまえ、養護教諭による性に関わる健康教育プログラムを実施した。また養護教諭が集団指導を実施することの意義及び効果についても考察を加えた。

2. 性に関わる教育とライフスキル教育

中学校において性に関わる教育が、計画的・組織的に行われていない原因のひとつにその目標が共通理解されていないことが挙げられる。文部科学省が掲げる学校における性に関わる教育の目標をみると「自ら考え、判断し、意思決定の能力を身に付け、望ましい行動を取れるようにする」とされており日常生活における実践化を目指すものとして捉えられているといえる。つまり、性に関わる教育には教員が重視する生命尊重の認識を深めることや正確な知識の習得という視点に加え「認識を行動に結びつける」という適切な意思決定・行動選択能力の育成の視点が重要であると考えられる。

そこで、認識を行動に結びつける健康教育の手法としているライフスキル教育に着目した。ライフスキルとは「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して建設的かつ効果的に対処するために必要な心理社会的能力 (WHO, 1997)」と定義され文部科学省の性に関わる教育において最終的に目標とされる意思決定・行動選択を可能にする能力と重なっているといえる。そこで性に関わる教育にライフスキル教育の手法を取り入れ、生徒が性についての考えを伝え合う場を設定すれば、他者の考え方や価値観に触れることができ適切な意思決定・行動選択の前提となる自分自身の性に対する認識が深まり価値観の形成が期待できると考えた。本実践では性に関する行動への意思決定・行動選択能力を育成する上でのライフスキル教育の手法を用いた実践効果を検証したい。

3. 実践プログラムの目的・方法

実践プログラムでは①生徒に自己の性についての認識を深め、価値観を形成させることを通して、②性に関する行動への意思決定・行動選択能力を育成することを目的とした。

実践においては、ライフスキル教育の生徒の相互交流が図られる学習形態を多くとり、まず基盤となる知識の習得を行った。それをふまえた上で生徒同士が意見交流することで自身の性についての認識や価値観を深め、意思決定・行動選択能力を身に付けることを目指した。

○対象：A 市立 B 中学校 3 年生 313 名

(男子 157 名、女子 156 名) 全 8 クラス

○実施時期：平成 22 年 11 月 10 日～30 日

○教科領域：保健体育

○時間：1 コマ 50 分×2 時間

○プログラム名：「こころとからだの学習」

4. 実践の結果

事前事後アンケート及び生徒の感想より、正確な知識の習得は生徒の性に関わる適切な行動選択において重要であることが見出された。意思決定・行動選択能力の育成に関しては十分な効果が得られたとはいえないが生徒が自らの性への認識を持ち価値観を醸成する効果が確認できた。十分な効果を得るためには、事前の学習の積み上げ、他教科との関連付け、養護教諭の集団指導における力量が重要であると思われる。

5. 総合考察

性に関わる教育を集団指導で行う場合、個人差への配慮が非常に重要である。特に中学生は成長発達に個人差が大きい時期でもあり、性に対して抵抗感や嫌悪感を抱き参加に消極的となる生徒が存在することも考えられる。しかし、将来直面しうる性に関する課題に対して適切な意思決定・行動選択をするためには、その前提となる自身の性について認識を深め、どう考えるかという自分なりの価値観を持つことが重要であると思われる。そのためには、集団の中で生徒がお互いに性についての考えを交流させ、他者の考え方や価値観の違いに触れることを通して、自らの性に対する価値観を醸成していく場を設定することが効果的であると考え、生徒参加型の学習形態をとるライフスキル教育が適していると考えた。実践では性的な興味関心の高まる思春期の生徒たちの反応や教員・保護者の受け入れに配慮し学習指導要領に沿う形で学習への導入を行い、生徒たちの主体的な活動参加および相互交流を図ることができた。実践の結果、生徒自らが羞恥心や抵抗感を超えて性について考えることの重要性に気

付いたことが捉えられ、自身の性についての認識を深めるという目的①を達成する上で今回の実践は有効であったと考える。目的②については今後の取り組みへの課題としこの先の生徒の成長に期待したい。

また養護教諭が性に関わる教育の集団指導を実施することへの期待は高いが保健室業務との兼ね合いなど課題は多い。しかし一方で集団指導を実践する意義及び効果も大きいと思われる。

その1つは、集団指導を通して直接生徒と関わることで保健室では把握できない生徒理解の深まりや新たな気づきを得ることができる。このことにより保健室での実践を授業に活かす方向だけでなく集団指導で得た気づきを保健室での個別指導等に活かすという循環した教育活動を行うことができる。これは外部講師による出前授業ではできない、養護教諭であるからこそ行える実態に即した教育活動にほかならない。

また、養護教諭の実践は生徒が自己の健康課題を見つめ、それを自らで解決できるよう支援することである。「教える」ではなく共に考え生徒自らが答えを導き出すことを支援する「支援者」の姿勢は、性に関わる教育において生徒自らの認識や価値観を形成するといった共に作り上げる作業を実施する上で重要な姿勢であるといえ、生徒主体の活動を主とするライフスキル教育の実践者としても適していると考えられる。

6. 今後の課題

今後は、現行のカリキュラムとの連携の上、性に関わる教育に対する意識改革を進めていくことが重要である。また養護教諭には集団指導における力量を向上させ、校内において性に関わる教育を進めていくコーディネーターの役割を担っていくことが求められる。

修学指導教員 隈元 みちる